



『霊界モバイル』

「お兄ちゃん、わたし死んじゃうんでしょ？」

突然のサユの質問に、僕は何も答えられなかった。

「パパもママも、そんなことない、すぐに良くなるよって言うの。でも、わたしわかってるんだ、全然良くなってないの」

「そ、そんなこと……、ないよ」

僕は動揺をかくせなかった。笑顔がつかれない。

妹のサユはほんとうなら来年から僕と同じ小学校に通うはずだった。でも恐ろしい病気にかかってしまったんだ。

僕は何日か前に、パパとママが夜中に話しているのを聞いてしまった。

サユは年を越せないだろうと言っていた。

パパもママも泣いていた。

その夜、僕は朝まで眠れなかった。

「ねえ、お兄ちゃん。ひとつお願いがあるの。聞いてくれる？」

「え？ なに？」

「死んだらお兄ちゃんやパパやママとお話できないでしょ？ それがとてもさびしいの。だから天国ともお話できるケータイ電話をつくって欲しいの」

なんてことを言うんだらう。僕は涙を止めるのに必死だった。

「ねえ、だめ？」

「わかった。つくってやるよ」

そう言って僕は病院をとび出した。

おもいきり走った。

どこまでも、どこまでも、どこまでも。

走って、走って、走って、

疲れはてるまで。

涙が風で横にながれた。

僕は家につくと、さっそくチョコレートのカラ箱を二つ探しだして、おり紙をまいて絵を描いた。

ていねいに、いろいろな色のおり紙を切りぬいてボタンをつくる。

そして最後に、いちばん上に「霊界モバイル」とマジックで書いた。

僕はさっそく二つの霊界モバイルを握りしめると、病院へとむかった。

いつの間にか走っていた。

すぐに渡したくて、

はやくサユの笑った顔が見たくて。

「わあ、すごい！ これで死んじゃってもだいじょうぶだね」

サユはうれしそうに霊界モバイルを耳にあてた。

僕も笑ってもう一台の霊界モバイルを耳にあてる。

「もしもし、おにいちゃん、聞こえますか？」

「はい、もしもし、聞こえるよサユ」

「おにいちゃん、ありがとう」

「……うん」

こんなに可愛いサユ。

僕はくる日もくる日も、妹を助けてくださいと神さまに祈った。

「ご臨終です」

「サユ……、いやーっ！」

その瞬間、ママは床に泣き崩れてしまった。

「サユ……、ほんとに、よくがんばったな。最後まで、えらかったよ……。大好きなサユ……」

パパは泣き顔にむりやりに笑みをうかべて、サユの頭をずっとなでていた。

サユは最後まで僕のつくった霊界モバイルを握りしめていた。

僕はただ、たたずんでいた。

涙が滝のように流れるって本当だったんだな……。

この涙は止まるのだろうか……。

僕の手の中では、もう一台の霊界モバイルが潰れていた。

サユはクリスマス・イヴの日に死んだ。

僕は絶対に神さまなんか信じない。

そう誓った日だった。

年末はなぜか機械の設計の仕事も忙しい。僕は毎日残業続きだった。  
携帯が鳴った。

「はい、もしもし」

「あ、お兄ちゃん？ ひょっとしてクリスマス・イヴなのにまた仕事なの？」

「ああ、サユか。忙しいんだから仕方ないだろ」

「ダメねえ、早く彼女のひとりでもつくりなさいよ。もうすぐ三十でしょ？ そんなんじゃ嫁の来てが無くなるわよ」

「大きなお世話だ。だいたい何の用なんだよ、このクソ忙しい時に」

「そうそうそう！ 実はね、ようやく念願のテストにパスしたんだ！」

「テスト？ いったい何の？」

「じゃじゃーん！ なんと、生まれ変わりのテストです！ ピースッ！」

「はあ？ 生まれ変わりのテストお？ 何、それ？」

「私ね、明日、赤ちゃんになって生まれ変わるの。そのためのテストだったの」

「え？ 赤ちゃんて、いったい誰の？」

「それは言っちゃいけないことになってるの」

「なんだ、それじゃせっかく生まれ変わっても逢えないじゃないか！」

「どのみち私の記憶は消えてしまうから、逢っても判らないわよ。それに赤ちゃんだしね」

「そうか……」

「でね、霊界モバイルでも、明日からは話せなくなるから、サヨナラ言おうと思って」

「……父さんと母さんには言ったのか？」

「うん。さっき話したよ。また泣いてたけど、お前が幸せになるなら、それでいいって」

「そうか……」

「お兄ちゃん、泣くなよな！」

「だ、誰が！」

「えへっ、冗談」

「もう、サユ！ おまえにやかなわん！」

「お兄ちゃん、いろいろありがとね。チョコの箱の霊界モバイル、ほんとうにあの時嬉しかったんだ」

「あ、ああ……」

「大人になって本物の霊界モバイルを作ってくれて、パパやママとお話させてくれたこと、感謝してます」

「ああ、父さんと母さんも、お前の声を聞いて涙ながして喜んでたな。やっぱり娘は可愛って。少しは親孝行できたかな」

「別の人間に生まれ変わっても、魂の絆で繋がっている者は必ずまたどこかでめぐり逢うの。だからお兄ちゃん、その時まで元気でね」

「その時にお前のことわかるかな？」

「だいじょうぶよ」

サユは優しく笑った。

心を癒す笑い声。僕はこの声が小さい頃から大好きだったんだ。

この感覚。

そうだ。きっと僕には判るに違いない。

サユの存在を。

そのあたたかい心の温もりを。

「お兄ちゃん。じゃあこれでお別れです」

「えっ！ もう終わりか？！」

「何言ってるの、さっきクソ忙しいとか言ってたくせに」

サユはいつものように笑う。

「そ、それはそうだけど……。いや、もう少しなら大丈夫だから」

「お兄ちゃんは小さい頃からいつも優しいね」

「何を今さら……」

あの時のように、涙があふれた。

まるで滝のように。

はたして今度の涙は止まるのだろうか？

「時間だからもう切らなきゃ。じゃあね、お兄ちゃん、さようなら」

「え、ま、待てよ！ まだ話したいことがいっぱいあるんだ！」

「ありがとう、お兄ちゃん。大好きよ」

「待て、サユ！ サユ！ サユーっ！」

断続的な電子音が霊界モバイルの向こうで鳴っていた。

数年後、僕は熱烈な恋愛のすえに結婚した。

子供もすぐにでき、日曜日にはベビーカーを押しながら親子3人で近所を散歩した。

「おにいちゃん！」

いきなり通りに響いた声に後ろを振り向くと、小学生の女の子が兄らしき男の子を笑いながら追っかけていた。

「じゃあ、こんどは小百合が逃げる番だよ。僕が追っかけるからね」

兄らしき男の子が電柱によりかかり数え始める。

「あ、お兄ちゃんズルい！ 数えるの早いよ！」

「え？ そんなことないよ！」

そう言いながらも最初からゆっくりと数え直す男の子。

「えへっ、わたし絶対つかまらないからね！」

そう言いながら逃げさっていく女の子。

「可愛いね」

ベビーカーを押す妻が笑った。

「ああ、可愛い……、とっても」

数え終わった男の子が駆け出した。

僕は妻に聞こえぬよう、

そっとつぶやいた。

「サユ、がんばれ！ つかまるなよ」

その日、

僕は少しだけ神さまを信じたくなった。